



ベトナム人流 遺跡活用法

西村 昌也 (にしむら まさなり)

NPO法人東南アジア埋蔵文化財保護基金代表

李朝王妃の祖先墓は何処？

二〇〇一年の夏、北部ベトナムの平野部に位置するバックニン省で建設中の国道脇から磚室墓が発見された。磚室墓とは、墓室をレンガで築いた墳墓のことである。磚室墓は中国系の古墓であるがため、緊急発掘されないことも多い。しかし、この場合は違った。ズオンロイ村のはずれに位置しており、李朝(一一一一―一三三

たちも発掘に参加するよと言って、炎天下の発掘にボランティアで参加してくれた。そして、去年の年始めに発掘調査報告会を村役場の前でおこなったが、人口五〇〇〇人前後の村で聴衆が一〇〇〇人近くも集まった。みんなキムランの過去に関心が大きいのだ。

発掘では、陳朝期(一一三―一四世紀)を中心に高級施釉陶器を生産していたことが明らかとなり、出土したきれいな施釉陶器たちは、過去に自分たちの村も高級な陶磁器を作っていたんだという意識をもたらしつづけた。一方、北隣のバツチャンの方は文献などから陶磁器生産が古くに遡ることは確実ながらも、考古学調査が進展しておらず、キムランのような物証がない。キムランの人の意識にはバツチャンよりこちらの方が、生産開始が古かったのではないかと、こちらの方が陶磁器生産の本場だったのではないかと、という希望の憶測も生まれはじめた。

歴史研究グループの班長を務めるホン氏はさっそく出土した陶磁器類の複製をはじめた。特に美しい青磁の釉薬復元を旨として、試行錯誤を重ねているところだ。そして、役場や住民は、それまでさほど興味を示さなかった出土陶磁器片に興味をもち、それらを見せてほしいというところになった。キムランの人は臨時展示室建設のために、お金を寄付し、市の文化局に出土品の移譲をお願いするま



フーコック村での発掘前の祭礼。
最後は銅鼓を使って、向いを立てる



バックコック村での発掘前の祭礼。
酒、果物などは供物として欠かせない



お寺の奉仕会のおばあさんが
ボランティアで発掘に参加



キムラン村の遺跡。
川岸なので、雨期のあいだは川の水面下



キムラン歴史研究グループの
古者たちと複製した陶磁器。
左から2人目が筆者

で話が進み、出土陶磁器の一部は、キムランの管理となった。これから村の過去の栄光として、価値づけられるだろう。このように、地中からあらわれた遺跡や古物が、住民の郷土への意識に影響す

ることはよくあるようだ。もちろん、人びとの歴史認識は学問的手続きをへず、過去の姿を現在に映して、見栄えの良いところだけから作られている。しかし、これもひとつの歴史である。もともと人間

は歴史認識の再生産を積極的にこなってきたのだから。面白いのは、彼らの場合、地中の物証を自分たちの現在のために積極的に活用しているところだ。考古学者や文化財保護関係者顔負けである。

地面の下とのつながり

ベトナムで考古学調査をおこなって一〇年以上になるが、ときどき感じることは、ベトナム人(キン族)は、自分たちの生活空間が地面の下と直結しているのとらえているのではないかとということだ。

北部のナムティン省バックコック村で、村の歴史を探ろうとしていたときのことである。発掘開始に当たって、地霊や祖先に対してお供えをして、向いを立ててからでない、と、発掘はできないと土地所有者にしばしば言われてきた。もちろん田んぼや畑にしているところでは、ほとんどそのようなことはないのだが、代々、家を建ててきたような屋敷地の場合、たとえそこに今屋敷がな

くても、先祖に向いを立てないといけないのだ。隣村のフーコックという村の場合、三〇〇年くらいしか人が住んだ歴史がなく、ベトナムの村のなかでは新しい方なのだけれど、古老のなかには、土地に代々の地霊が蓄積しているかのように話す人もいた。もちろん新しく開墾して住んでいる場合は、それほど気にしなくていいことのようにも

歴史認識の再生産

次は、もつと積極的かつ肯定的な話である。ハノイ市郊外の観光地バツチャンは窯業で有名だが、南隣りにキムランという村がある。キムランは二五年ほど前から、バツチャンから窯業技術を移転し、農業から窯業へ転身を図っている。僕たちは、ここで考古学の調査と集落史の聞きとり調査をしている。もともと、古老たちが歴史研究グループを作った村の歴史を調べており、その活動を通じた啓蒙で、村人の過去への関心が高まってきていた。最初の発掘のとき、終了時に現地説明会を開いたが、「すまないね、外国人にこの村の歴史なんかを調べてもらって」と言いながら、おじいさんおばあさんが、菓子や果物を差し入れにもつて来てくれた。なかには僕のポケットに小遣い銭をねじ込む人もいた。二度目の調査時には、寺の奉仕会のおばあさんグループが、わたし